



臨本指畫(修)長記

後篇

六

特別
73
2507
19



遠門
號 2507
卷 23-19

繪本拾遺信長記後篇卷之六

目錄

英名永沈渡川車

兩下回重幸之陣城をどむ

手幸大之款兵を破る

手幸極尾と戦ふ

中羽信忠御陣陣之車

重幸入る

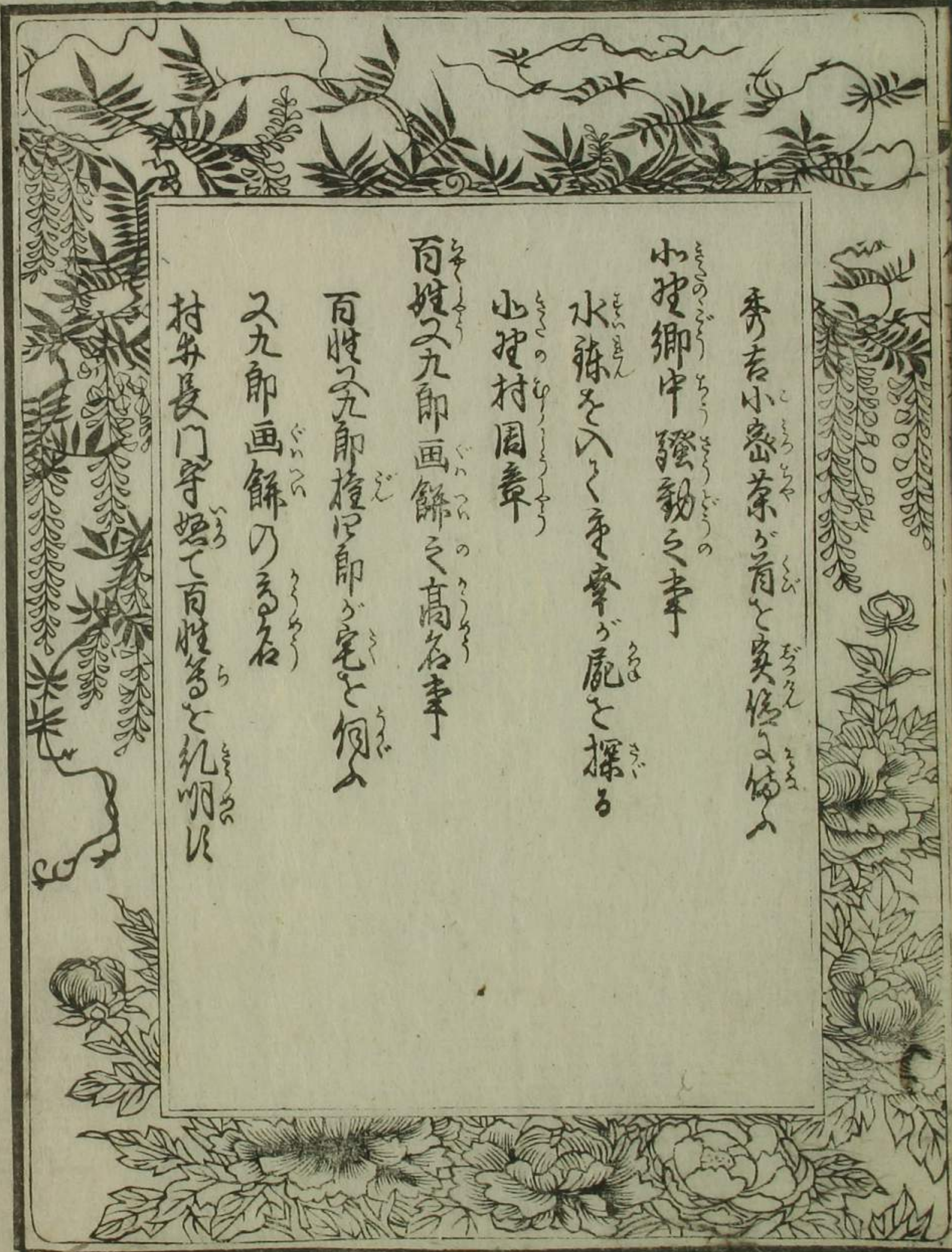
繪本拾遺信長記後篇卷之六



繪本拾遺信長記後篇卷之六

英名承沆渡川幸

け耐石山の城中には鈴木重幸しむらひのむねゆきのふり小清水表こしみづのあはらへ出張
 いまご降城くだりの沙汰さたなりたるに上人あがりも安うねり又石
 田家いわたけ老下らうげ同利郡どうりぐん御法橋ごほしはし日道ひみちに守備しうびとるに汝な兩人ふたり小清水
 の陣ちん又あり勝負しやうぶを論ろんせし重幸しむらひと何人なにびとゆふに若し重
 幸しむらひあやまらばいふ悔くやむもゆふにさくくと
 急いそがせ給へば兩下ふたご同かどうこまり六百むもも余騎あまの兵士へいしを渡人わたる馬うまを
 飛として小清水こしみづあり来りしれ味方あじかたの軍七しち烈りつ八はち載のり又崩くずれし礼れい
 重幸しむらひの僅わずか又三十さんじゅう余人あまの士し衆しゆと兩人ふたり小清水こしみづの丘かみ又馬うまと系けいの上うへ
 敵たての兵勢へいせいと隙ひまを居ゐたり下同利郡くだり御ごかくと見るより馬うまより



秀吉小密茶しむらひの首くびと突ぶつつ又またゆふ

小笠原中こがさわ發動はつどうの幸

水練みづをいく重幸しむらひの腕うでと探さぐる

山田村やまだ周章しゆしやう

百姓ひやくしやう又九郎くわにらう画餅えびい之の高名たか幸

百姓ひやくしやう又九郎くわにらう檀だん即すなはち宅たくを何人なにびと

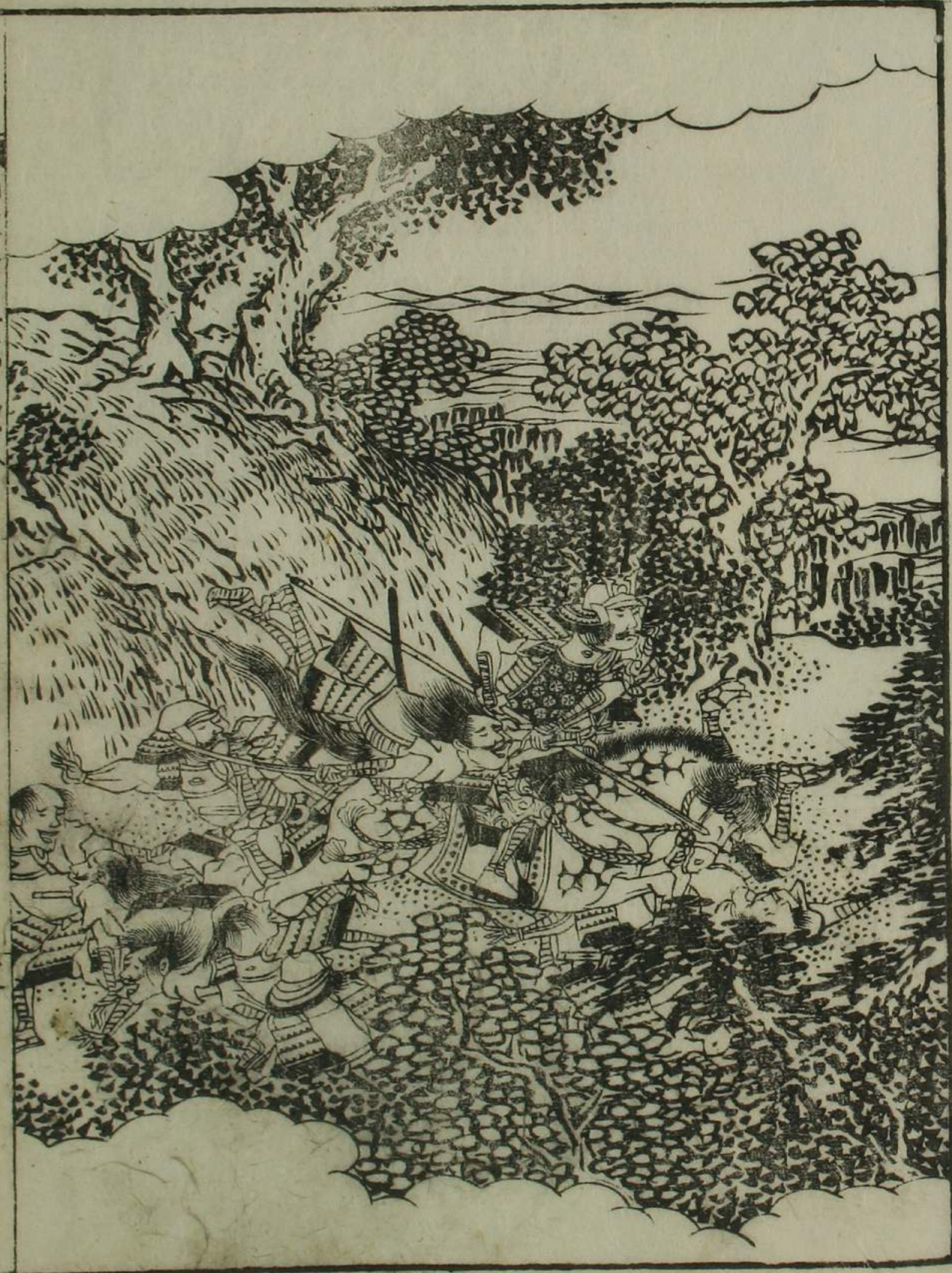
又九郎くわにらう画餅えびいのな名な

村井長門むらゐ守備しうびと百姓ひやくしやう多おほく礼明れいめい以も



飛り重幸が幕にきてより来る軍師乃其なき様を以て
 けとの女堵はし一人軍師の攻城せざるを以て海心と痛
 終ひ某を命に運へ海人き音終ら息とさきり其
 とをせく申うく只今糸着せり幸ひ軍兵と引率して
 参り以人のけ場の某をまうせり是より攻城ありて
 人の衝心と申せらるるに返し馬の響とて引入る
 重幸態と参とりらげこの正うたを以ていひのる石山
 の城中より若ありとあるとてうる給本重幸是を以て
 我は勝負も見極り地人又是居城に逃ゆりて
 去りていり矢を以ての恥辱を以ていりや吾は皆守院の
 護城突の武士の勝を知るはし似合ぬ我場は長居せん

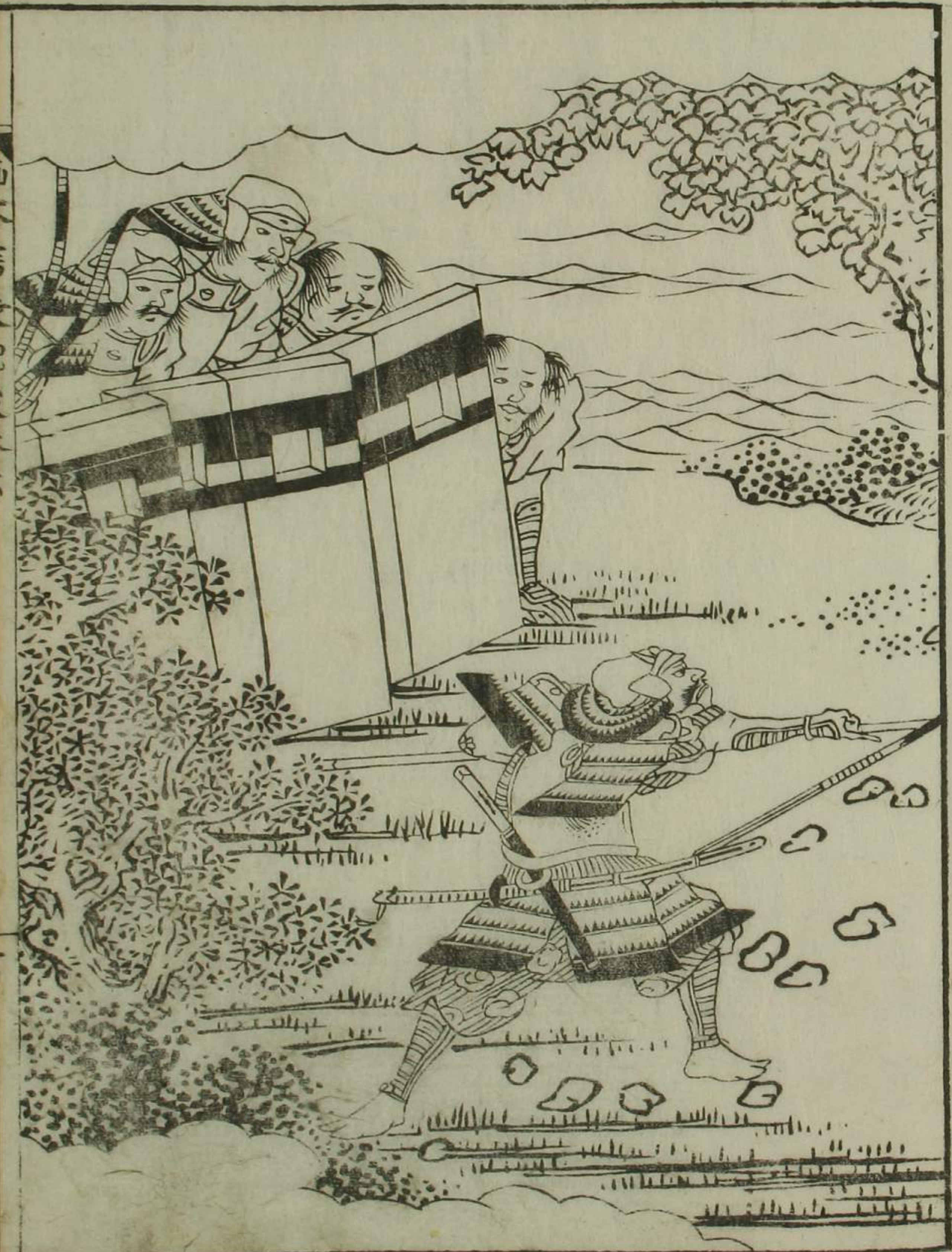
ちやく本城は地入り特口所を固め不虞の事とふせ
 以久らぐも城中石勢を以て心元はし又立攻急ぎ降
 城せらるべしと参小遠ひく重幸が悪口何れ免りて
 あと人の佐とをむき攻城はしとあるに某を得てそ
 退き申はしいざらとともはしんとあはれて争ふに
 羽柴が軍兵急いしくと周を焼く雲のどく押来る
 参りてはしりたる石山の城中を以て鬼神と以てて根
 の小密茶を加えて法正が良名本村又飛が討たりて
 む下同刑邪肝と法正のいざらぬ軍のさまうは足跡
 られりやと鏡の神とていざらぬ軍のさまうは足跡
 えて板付むらぐり来る款の中へ是一文書に編入り
 羽柴が



まがゆき
重幸
大に敵兵を
破る

軍兵八面より追ふ圍をこし重幸ぞ捨本ありぞ我討とめて
 多名せんと槍乃徳先と並ぶるの秋の神よ生入爲の徳の
 風よ飛るごとく之重幸何れもたせりあざれ抄のし一
 噴くごん入一が十重二十重よ罵もたる大軍を只一まぐり
 破る後より進み来る中村孫平次が軍隊を突崩し
 て奔るの旗本へ猛風の勢をこぞく馬と飛して証形あり
 尾帯刀若膝見事と叫ぶる十文字乃槍と捨れり突来る
 重幸尾目よりく槍をこぞく突んぞり討誰が敵つとも
 志ぬ流丸重幸が馬の右腹を門と打接む大地へ落し
 見しがひ線の重幸をこぞく後さまよ二回斗飛り
 堀尾も後よ馬を飛せり槍をこぞく蹴ひつるが互にばあ

別勇るれば毛髪を入る透向しうく時討をうりぞりこ合ける
 くれぞ今日の足物と羽紫が軍兵八方よりを圍み難波と
 飛つと勢と助くいしうりぐん堀尾が持つる十文字乃徳先
 三寸討ちて空中よ飛りくる重幸躍り上りて突んこもる
 を堀尾が良勇武の姿へつる若者三人切されと並べて切か
 りよば其間よ帯刀いし退きて息と焼うり重幸怒りて
 臂を延べ一人がと夢掴んでぐんよと上げ七八回投りし
 着砕けて忽ち死に重幸持つる槍瓜うらりと捨てたるを
 げ飛りゆと刀いしが足とよく今一人ををぶお斗をこま
 蹴上げ又一人が利腕をこちかり死に後し弓の腕をこま
 えひよば眼をい息をうりけあこまよ恐怖して放て追寄



志守
重幸と
堀尾と
我々



去
中
入
水



櫻とお遠し美うふだた中うもく皆くたけい居るわがに
らや川南の岸あは合戦始りしとて入る岡のまうらひ火の光り
騒しく立よれ信忠御の陣陣も備人と立よいとてわが馳出づ
き乃預勢をれに餘以てまうとびてさまぐ工まと凝しうら
不冷全き勝利りうくとも安まて信忠と喰らめどん川と後
して秀の舌に力と併せ味方の戦ひ難き方らじしとて陣
小の方るる在家に火とけ焼まらふ杉節風強くふれく
端陣居のよにゆりいうもあくと岡のまうらひ信忠御血
死壯人の若大ぬるれ馬よ石ま旗本乃勢と引て陣外へを
出給ふを明智惟恒とて引とらあうせ款の動靜も何だ
とぞうに馬と出給ふ大ぬ軍のあつたあつた大ぬ安を動き

終や味方の兵士教訓しと款の謀計と臨るべし我も友人計
兼成捕へあうり人只中軍よまう満軍の發動と終る終
と備りあれ信忠御実しとて麻元よとて軍糧よと發る者
らうの軍法をふさんと御下知あは明智惟恒軍中と廻り
一人も發動せはたぬの御前引出首と別だしと獨りう
よ石山勢八方よ激して火と敵ら岡分地よとも小田の諸勢
も動せに備人を堅めあうらうらうと扱られ元来小勢の石
山勢根に討せんしとて返しとて近辺に徘徊し若し小田勢
川と後さ其處よ高門と打崩さんて疾しとて親し居る
と明智惟恒の友人只堅固よ本陣と守門と疾い明とあめ
られば今つけあめくも冷返しとて蓋てを撃が給せしとて



ひでよしこまろ
秀吉小密
茶が
首と
実接
体入



夫より更なる石山城へ引退り去りて小羽柴藤原守重が討
敵を三度あげさせ小清の陣とせらひ信忠御の御陣より
戦ひの始終審み言はし「小密茶が首と上落の備へぬは信忠の
大なる憾し終ひ教奉が同味方の御方とやま世」重幸小密
茶を只一戦の討えり比類なき勲功と稱し終ふより重幸
君の嚴威を以て軍には勝てし今も終本重幸入の世」其
首と得ばは深元未謀計流死の者より生れ死の程も其
かみ保たせしけり長く御陣と居られぬ不慮の災と斗り
かしく國中に騒動し又味方兵糧の運送も心まきせし一
度御陣圍みく終る」とやあより信忠御に候は月世と
更なる芥川を御陣とらひあきくは及安出へ返城し終ふ

小羽郷中騒動事

初り小田内大臣信長公の今度重幸が討兼より年ころ
懇々御下しつる重幸と入あせし根元乃悪僧小密茶が
討えり「勢懐と敵」終へども重幸が生死定らるるし
心を安んじ終り氏系都乃月代村丹長門守又佐て渡川の
水屋へあ練の者といひ重く重幸が死骸やけりと扱
求り終ふよけ戦ひよあ死の者にも入ありされと更一人
と死骸といふは「よ」とやあより「あゆみの活の早急のよえ
られがよやく大洋とく流さつらんは母が」されども若や
命あう人再び石山とく終りぬらん又討死の報きとい
終く世よ沙汰せし密に近より懇し「あつるのりやと

内く長門守又物せく重幸が為る所とらりし所給ふ
村并命を令してより石山乃湯中へ回着と入まじく
史撰ふよ事幸が討死にお遠る所や工人を給り城中
乃お率朝夕事幸が戦死と歎きけらる工人自吊ひの
法よりと福んごら又後一給ひ工中の人々懸傷のありま
つて何れ之と若れん長門守とて討死せしとお遠る
重幸生てあんのさりの石山又霧城せし何國より
居べきさといふと京中又いふ郷に強き居るなりあり
月乃為る度多るべし飽まじく吟味せんふは如くと洛中外
いつふよ及び此道在を郷へ西若を命て事幸が在石と若け
所る若くは獲る所はかよは法とてしと編述しる京中の

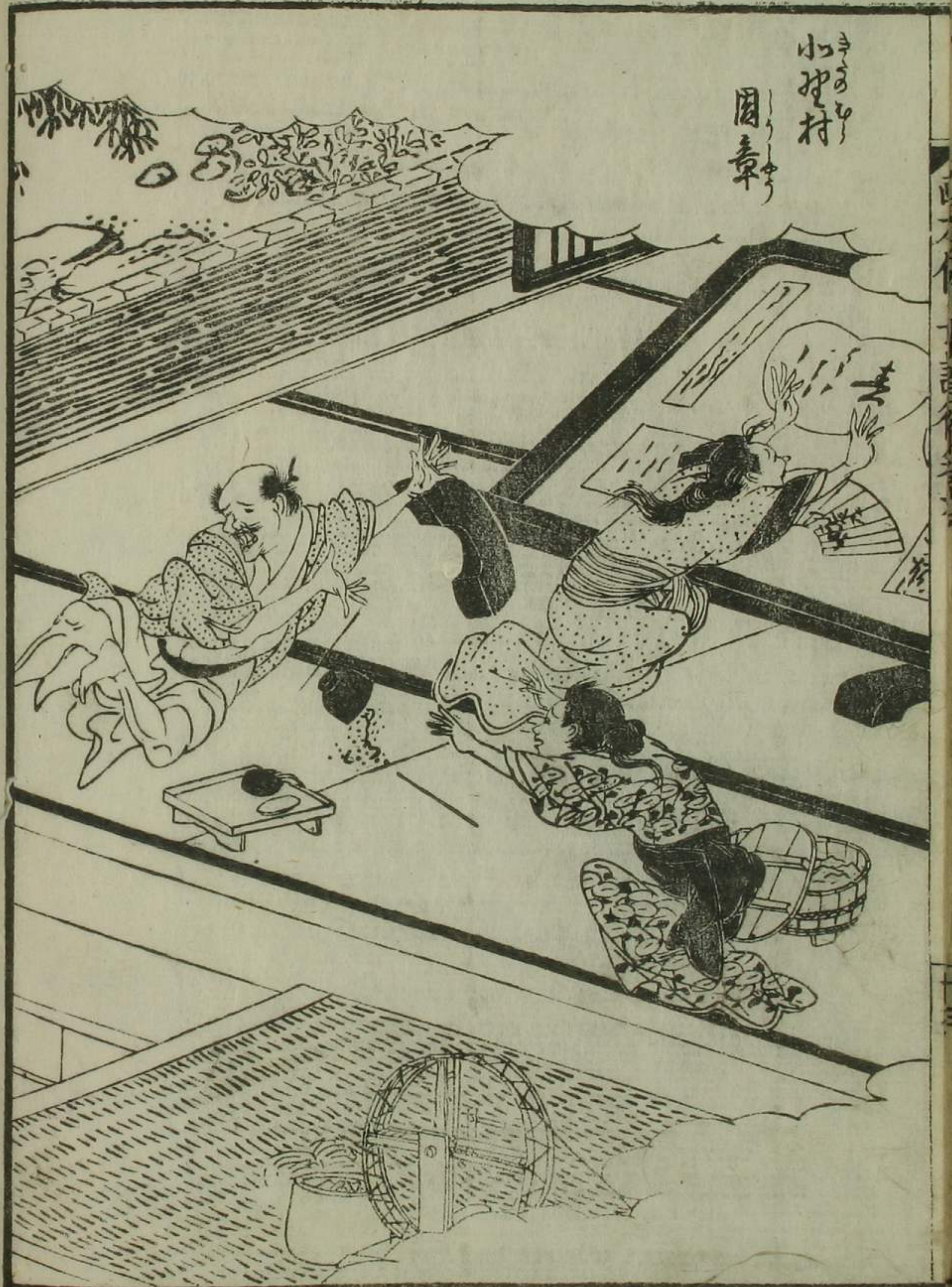
まうんべ集りて乞や火給づこのはごらも求りしつし人の
物びり又曰く己人と撰り得んや實に難しと私云あひ
て多ひる家よ小井郷乃中又長しく書しる下百四拾二即
とくろ男あり八九年以若り此郷中又後若はして朝夕乃
烟さるるひこれとまらるいこころ心もろく愚史を命て人の中
これ誰いふもちろ其つしへい中けらる若の采りしと若ら
あひくよ生國の紀州なるはしに付近き以より石山城乃謀士
於本原花湯門重幸がゆり乃若らつひを命つるふぞ何れ
人抱りしつしくひ久るせる業をも智恵あげよんはし心やとく
変る者いらうとさまよ於本氏の親族とやと思ふとも花中の
若らてい曾てはしつし人とも所用若源と男らんべのつと

突の語に「換めく重幸が如斗と受てけ不にみと中」居
たうんるとさまぐと「元沙法」もまきの種をいばくとけ男と
せいどの女と異名して郷中の男女恐まあひくるたうふけさ
程に即が家に申あげたる武士一人をかきまひ居世と志のふあ
さまよひそと強う、体子細こそつらうめと近隣の男女月と付
心をとらぬ類ふと股の傍に鉄炮底と押し「き痕ありて日よ
系より医師と振きむ久治療とるん体扱ひ系より觸らさる
石山の軍師鈴本重幸程に即が家にみと強し「女底と係書
一再び大戦を終らうとい信長ととぬ者らうと」さういのに
やぶ小程に即が耳よこそ入う振も郷中の只けさのそと語り
あひ強し「あまの村中一統後口乃罷科のうと」は「あまの京都の

附同代「遊へ出」とく石の底屋へかくとちおまのけ底屋
大又肝と流し「おまの飯の食」して居りたるが「おまの飯」と
とくと「元海」西きたらまらま菜のどくと「みをふる」してヤ
い其重幸とつみ若と見為岩の若ととらうや胸は孫呉が計策
と「茂」糸菜朝比系が勇力をうみ人を殺とるの菜と中が志
とく火と殺つて家底焼き水とを門とけ村よ来ることを強
が運命の盡さうなかるべ「天下の武お信長とよさ人幸さ
目見世」鈴本なるぞ今よも同代へ「遊へ捕まの人数八百
七百来り」うた彼重幸怒りを記「極切よとらりのかぶ
け村の男女老少一人も命たさう若いあし「らるあさは
時の向ふ死人のと瓜菜らんとさめぐと泣くれい始めく

驚く男女の百姓死物ぐるひの驚くぬ内足騒ぐもを助へ
 老より瓜たけ切雅をいざなひくくは逃出れば後こそは
 村中の強勅大方うへびと瓜下へとりて以ぬけ村又九郎
 とる若者あり力飽き強く角力と好腕立と若の業
 に酒飲てい園事をい郷中道立を抄いて忍びて去る者
 は今け強勅と見えたる大制しを幸ひ信長の懇款石山の城
 を出さば天下の衆人かく仰く「きつり」とまうて幸とを
 逃さば信長の啓めを受け後悔はくも益あはし又庄屋及の
 周章もあしけれ幸石山の城は益々兵に教方の軍兵と
 引て戦へばこそ多くの人を殺し名はる武士の首と見え只
 一人は村は強を居る名の異をもとと突のあを離し如く

何後のみを仕知れば「我も力を添ふ者三入人ありのうへに
 道で掘り捕んや何の子細あふきや海軍力ありありは
 我も知れあふかり幸ひは捕りし首尾よく仕保せ披露の
 獲るるに取んし又幸ひありありはやとむる中うに励せは
 百姓もも是とぞく何とま珍本らんがて鬼をもあふくは
 其いし鉄炮砲も我もさうとえくし「き働きはなるは」
 又九郎がまふあにまういし「さうして」といし「一層の
 若者三十余人又九郎は同心に又九郎大きに鉄い百姓若
 知れくらの重幸けしをばく逃し出んも我もさうして
 三人は指に即が家のに方又懐伏し若も幸出奔とん三様
 子と見ればと吹て相國とるせよ其時二日ようけをせても



小波村
周章

余は後炮を討殺せん日くは夜ふけ履込へをくせそ
付て生捕んこそ十分の勝利なりと志しるがう飯は石山
の軍師智勇ゆへに珍本重幸何なるも術と構へて
知りて先系の御目代へ海へ出捕るの軍兵よきを
多強くてとらんがうの大勢困りて生えぬ誰か
竹槍の用意をとどめし志の角の働も小も兵糧た
くさひはつは「麦大豆のきりひるく家並に集めて
とくよ知れはるる村中の者大さ小感」極もく
是すといふに大酒飲のと人づは「くいさうり」今
の軍配兼り臨と心腹に「うり重幸が謀斗軍勢と申
ても又九郎は及ぶはしいで知れどくは働くは」と
以承の

周章引くく御巻引る御獄うまふにぐ引さげさひ
くは近ゆらる

百姓又九郎画餅之高名事

京都の目代村長門守が館の門破るむうり又打町私た
い小控村の百姓とてい一大の御役進やさんお馳込に
息つぎおびのりけ長門守へ申達し何事やと
白砂へ吹ゆ幸の子細と見ゆら小先達て御觸書に
「石山の軍師珍本重幸小控村の百姓控に即ち申
のよしよたよりけ後より隠し候は候若や立退」し
御智めと思入村中の者密に方々を圍て是又速役進
急ぎ御勢とせられ石捕へらさし」と云ふ長門守是と



百世又九郎
拾郎が
宅と
うら
親ふ

西本信長詩巻六

不審すやとて一人相率鬪鬪は百姓の中衆分ぬるべしと
 又とも似たりたるものもあはれび人遣よもあはれし
 ぬしうろんとて於て捕まのふりよ中知し若も其の事幸なり
 ば古今よ本所し武術勇力多困りそい叶ふはじと鉄炮の組
 七十余人を畜の村に百余人只燈凡三百人都合其勢に百
 十余人彼百姓と毒田者としりよりんで水押村へ馳つけ
 る又九郎彦屋と佐村にまて出逢へ又九郎後人よ中やうの
 重幸の武勇の曲者なりば多人殺押せせ搦め捕んとぬ終に
 渠必死なぬと強く働き死傷の者も出まらん河勢の
 権に郎が家のに西と丸田と河見合せとれぬに「我もまらぬ
 へ」換子と何の陸も働させぬに「仕負せぬ者なり」の言方

の河吹奉よとて武士よ五五後りゆし若も強くて捕へぐり
 ち敷と鳴し相圖とぬしやべし其耐の急よ込へ飛道具よ
 折え後と息も後れに働さうらうら子細をよべてをよ
 権に郎が家のに西はまうぐよ勢をからり鉄炮の侍人殿
 よ聞え既よとの人ば又九郎の膽をく力を得らる百姓六人と
 志さぐ人権に郎が表にすう何よよよく履入る野の暮外面
 史ゆ志とはしうとはおんとも大強勇の鈴本重幸一方るぬ
 大敵るに胸躍り参るひいぐりせんとためしひしう舟の舟
 立寄あはれよとてぐりとのと下し震ひも少し止まらん竹
 のよよ行足と踏くこめ出口の雨戸よもぬけ押勢せえり
 らぐりなる家内り堅固の志まうりもあはれこそ鴨居ゆんで離



うんと内には彼重幸と見しくて物事とぼろろりや歌
 の夢きこゆふそのむ三がうとはあふもよは「やぶを捨てこ
 そ深む濃もろき嚙付て捕へとい止まじ」と力を極めてひき
 たるせば雨戸陵子いらくりやと用け其不勅くるる飛込を
 件けんの重幸寝る蒲團とわいのよのけ表の方へ逃出んを
 ろふ又遠入りりたま叔の謀計とかま人何り負て款と引んこや
 返し合せそ易者の勝負せよと追さまよ弱腰と蹴りし
 美う門あけよとどと倒して立ちあがり又九郎飛う門を首
 筋えをぐりんとろ付腕押おてるふ小むいほ「表の方
 の戸を開き石山の嶽中をそ降一と叫きたる珍本源九郎門
 射重幸を山押村の百姓又九郎が搦め捕らるそや出合たま

人と天にも郷者く大書そそ呼ぶふぞに方と望し「娘子の
 大勢むらくと馳集り彼百人を交え控は郎と後よ列立
 とせ京都に」して海りううけ時秋いかのぐと明後さばる中
 の美徳もやけ事を安傳人珍本重幸と山押をて生捕しこ
 や古今よ「あ」智謀の勇士西鑑をけんえへ長流りあよせん
 と老若男女共よ出て見物とるるや押び「」系中もまこと
 勅揺せりれて村舟が籠よ列とは長門守元来重幸こい
 一面の更りあり勇士の像と交りよは眾人と同じうにれを
 正しく見ゆ「」とく先廣間の極側よと「娘子の力士た
 右につらうり殿をよ守護くう長門守の馬帽子大紋は
 俄を縮ひま出て像とそれの重幸よは似もつらぬ面のまこと



村舟長門守
紀明氏

百姓

ざめて病勞とる結浪人之長門守大さ小怒りまうあま
 大屋へいこと蹴落し己何者かれば鈴木重幸とつ門より
 武野の姿形不承嘲喝せりやま活石部曲者拷問はけ
 てさくこの次牙白状させよといらうや罵らる座と立て入け
 とは左右の力士彼浪人と宙より引上げ楯に即ともも先
 牢獄へ入量扱えんくと紀回より小元より鈴木重幸人と
 怖りし是へ毛毳是るく私より松尾の社乃津賦りが此以
 便毒とけいありの不浄りをみて津若の勅を恐る小津村
 の楯に即い後分よそいへ彼が家に勢もあつく藤原の
 けのこもて文よ悪しやあけらる是れなくいゆを重幸の
 討つて盗賊の何れ換子それえも恐らしとそいありし

よ楯の外から大勢ら鉄炮よそえ圍よけ津屋飛へ引出
 るり始終何の疑もと中よりをまきまへに教心して五
 度しよ鈴木重幸が名と怖ると乃津去り憂にも心得
 中さぬり何と津渡中へさや突に流る小馬藤原
 し心地よそいと委細よまよとはまが飲て楯に即と引出
 紀明より小彼者かや言よあつたがま長門守も
 阿きれまそく信長云乃津渡よ入らば面目を失ふのそり
 びいりり津渡りをや夢りあんと恐とそれともいかん
 とも詮方なく彼津賦と楯に即い其ま家れ入ささ小
 津村乃屋官今度の一件藤原のそりまひなりとそく退
 放せよと百村又九郎がそり名教といたづらあうとそり

日本傳 卷之六

九四

魁^とも角^{かく}も重^{おも}牽^{けん}が英^{あひ}名^な世^よに^まる^るく^くか^かく^くす^すて^て人^{ひと}の^{おそ}恐^{おそ}ま^ま
々^々も^もあ^あら^らじ^じと^とぞ^ぞ評^{ひやう}し^しら^らる

繪本拾遺信長記後篇卷之六終

